

## Program

### 1st Stage

<i>Take Me Home, Country Roads</i>	カントリー・ロード	J. Denver, B. Danoff, T. Nivert / 武藤理恵 編
<i>Story</i>	ストーリー	2SOUL / 森本和幸 編
<i>Last Dance</i>	ラストダンス	武藤理恵 編
<i>La Strada</i>	道	Nino Rota / 武藤理恵 編
<i>St Paul's Suite</i>	セントポール組曲 I, IV	G. Holst / O. Hirasa 編

### 2nd Stage

<i>Song without words</i>	無言歌	Vaja Azarashvili (1936~) / 平井 朗 編
<i>ITALIA Marcia Eroica</i>	英雄行進曲 イタリア	Amedeo Amadei (1866~1935)
<i>Reverie de Poete</i>	詩人の瞑想	Giuseppe Manente (1862~1941)
<i>Incantesimo di un Sogno</i>	夢の魅惑	Ugo Bottacchiari (1879~1944)

## Program Notes

### 1st Stage

#### □ カントリー・ロード

もともとは 1971 年にジョン・デンバーによって歌われた曲だが、日本では 1995 年公開のジブリ映画『耳をすませば』のオープニング曲として有名である。

映画の中では主人公の月島雫が"カントリー・ロード"として日本語詞でカバーしている。  
"カントリー・ロード この道 ずっとゆけば あの街につづいてる気がする カントリー・ロード… (略)"  
親しみやすく心に残るメロディーが武藤理恵氏により美しく編曲されている。

#### □ Story

「Story」は、AI の作詞で 2005 年に発表され、今も歌い継がれる彼女の代表曲である。この曲に込められているのは「人は、誰かとつながっている。決して一人じゃない」という優しいメッセージと、大切な人に向けた力強い愛情である。

“限られた時の中で どれだけのコトが出来るのだろう…  
言葉にならないほどの想いを どれだけアナタに伝えられるのだろう… (略)  
一人じゃないから キミが私を守るから 強くなれる もう何も恐くないヨ…”  
ディズニー映画「バイマックス」日本版エンドソングとしても、この曲は独特の存在感を放っている。

#### □ Last Dance

「上流階級の青年と少女。二人は幼なじみであったが、青年は結婚をして遠くの地へ行くことに。別れの前日に青年のお屋敷で、子供の頃からいつも一緒に踊っていたダンスを踊る。踊っているうちに少女は青年への恋心に気づく。青年もそんな少女の心に気づいてしまう。しかし、お互いに何も語ることなく別れとなる。その後二人は生涯会うことはなかった。」

イントロとエンディングで奏でるギターの余韻、前半でのマンドラ、後半に現れるダンスの情景を楽しんで頂きたい。

#### □ 道

1956 年のアカデミー外国語映画賞を受賞したフェデリコ・フェリーニ監督の「道」。イタリア映画特有の深い悲しみを全編に漂わせていて、多くの人の心に残る作品である。

粗野で暴力を振るう旅芸人のザンパノと、頭が弱い心の素直なジェルソミーナ。この 2 人を主軸に話は進んでいく。イントロのマンドチェロから始まり、前半に現れる芸を披露しているシーンなど、何度でも映画を見返したくなる曲である。

#### □ セントポール組曲

1905 年からロンドンのセント・ポール女学校の音楽教師となったホルストは、女学校の弦楽オーケストラのためにこの曲を作曲。ホルストと言えば、代表作に「惑星」などがあるが、この曲は、イギリス民謡をふんだんにとりこみながらも、時に非西洋的な要素を織り込むなど、色彩豊かで親しみやすい曲である。

本日の演奏は、この組曲の中から第 1 曲：Jig と第 4 曲：The Dargason

#### I. Jig

Jig とは 16 世紀のイギリスで流行した舞曲である。8 分の 6 拍子と 8 分の 9 拍子の間を頻繁に入れ変わる非常に陽気でエネルギッシュな曲である。

#### IV. Finale (The Dargason)

Dargason もまた 16 世紀にイギリスで流行した舞曲である。踊るように変奏を繰り返していくうちに、誰もが知っているあの有名な曲（イギリス民謡）がマンドチェロと 1st マンドリンによって奏でられ、対比主題として重なりあいながらフィナーレに向かう。

### 2nd Stage

#### □ 無言歌

ヴァージャ・アザラシヴィリはグルジア共和国（旧ソ連、現在の国名はジョージア）の作曲家でチェロを響きの主軸に据えた楽曲が多い。この「無言歌」のもととなったのは原題が「Dgeebi Midian」（過ぎ去った日々）というグルジアの民謡である。本邦ではあまり耳にしない作品であるが、センチメンタルで非常に美しいメロディは日本人好みといえよう。

器楽曲である「無言歌」は、歌で聴いてみるとまた全く違った印象を持つ曲である。

下記 QR コードから試聴可能。（\*コンサート終了後会場の外でお願いします）

#### □ 英雄行進曲 イタリア

「英雄行進曲」という副題のとおり、明朗かつ堂々とした行進から始まる。ここでは滑らかに演奏されるギターの和音が効果的に用いられ、曲の力強さを引き立てている。途中で 1st マンドリンと 2nd マンドリン、マンドラが奏でる対位法による掛け合いに曲調が変化し、また 2 拍子から 4 拍子へと変わることによって落ち着いた雰囲気も醸し出している。そして再び堂々とした行進へと戻り曲を締めくくる。

#### □ 詩人の瞑想

マネンテは「降誕祭の夜」・「国境なし」・「華燭の祭典」・「マンダリン芸術」・「メリアの平原にて」等力作が多い。冒頭はマンドラとギターのソロによる主題の演奏。それに続く全パートの主題の再現が柔らかに温かな調べと共に詩人の世界へ引き込んで行く。詩人は瞑想を続け雄大とも思える高まりを見せた後再び深く瞼を閉じる……

#### □ 夢の魅惑

作者ウーゴ・ボッタキアリは、「交響的前奏曲」・「IL VOTE」・「彷徨える霊」など、多くの名曲を残している。「夢の魅惑」は、彼が亡くなる 3 年前の作品で戦時中の 1941 年にシエナで行われた作曲コンクールで一位に入賞した。この曲の特徴は、イタリア風の甘い旋律に不協和音を取り入れ、減和音・増和音の多用、半音階の使用など近代的な転調を用いることで調性が失われていくところにある。冒頭、低音部によって提示されるシンプルな主題が徐々に高音部へ展開し、三連符をベースにした伴奏（主に 2nd マンドリン、マンドラ）を伴って美しくもせつない音の空間が造りだされる。主題が全貌を現した後は波打つように曲中に多くのクライマックスを築き上げ、人の一生同様・最後には儂い夢の如く消えていく。



【無言歌】スマホの QR（バーコード）リーダーで読み取ってください。会場外でお願いします。

\* ホール内ではスマホ・携帯電話の電源をお切りいただくかマナーモードに設定をお願いします。